

ベナンにおける家庭での実践から考えるごみ問題への対応

平 尾 莉 夏 *

調査地へ寄せる関心

私は、ベナン中北部の都市ジュゲー市で、家庭でのごみに関する実践について調査を行っている。本稿では、ジュゲー市で広くみられる家庭ごみの対処方法を紹介する。

初めてジュゲー市へ来たきっかけは、JICA 海外協力隊（以下、協力隊）だった。ジュゲー市ではごみ収集が確立しておらず、ごみの野外投棄による公衆衛生の悪化が課題とされていた。この課題解決へ貢献するため、私はジュゲー市に派遣された。任期を終えた 2019 年、ジュゲー市の青年らとともにごみ収集を行なう組織を立ち上げた。私自身は日本で就職し、彼らから現場の状況を聞く中で、ごみ収集の確立は一筋縄にはいかないことを実感した。協力隊以来、課題解決に貢献できた実感があまりなかった私は、課題解決により堅実に取り組みたいと思い、大学院に進学した。

私は、ジュゲー市の人々がすでに行なっているごみの対処方法を学ぶことに関心がある。協力隊員時代、市役所のボランティアとして小中学校で経口感染症に関する講習などを行なっていた。経口感染症とは、飲食物または手指を介して、病原体が口を経て体内に入ることで引き起こされる感染症を指し、腸

チフス、A 型肝炎および赤痢などがある。開発課題が山積する中、ごみやし尿といった衛生分野の優先順位は市の政策において必ずしも高くなかった。また、個々人のレベルでは、意識と行動は必ずしも同じでない。たとえば、ごみ箱やトイレといった設備がなければ、衛生的な環境や身体を維持したい意識があっても行動を変えることは難しい。しかし、新しい設備の導入には、費用や管理の問題が加わる。そのため、すでに行なわれている、人々による自発的な実践を課題解決のために活用できないかと考えた。

朝の掃き掃除の習慣

調査を行なうジュゲー市は人口約 30 万人を擁する都市であり、人口の約 80% はイスラム教徒である。人口増加率は 3.5% であり [B.E.S. 2019]、都市の拡大と経済活動の多様化が進む。人が密集して暮らす都市では、衛生的な生活環境を維持することが課題となる。ジュゲー市も例外ではなく、住民と行政は市内のごみの管理状態の改善へ意欲が高い。

家庭ごみおよび家庭でのごみに関する実践は、人々の暮らし方に基づいている。家庭ごみは人々の生活から出ると同時に、ごみに関する家事の担い手は、家に住む人々の構成か

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

らも影響を受けるためである。

ジュグー市では、複数世帯が同居して暮らす複合住居がみられる。一般的には、結婚すると、妻が夫の両親が住む家に引っ越し、夫の両親宅から夫婦が独立して新居に移るには、新居建築または家賃支払いの経済力、夫の両親と夫婦との関係、および夫婦間の関係性などが意思決定に影響する。妻が姑との関係性に悩むことは珍しくなく、夫婦が独立して家をもつことができれば心労が減る。逆に、夫の両親の存在が夫婦間の平穏に貢献する場合、独立を望まない。このような要因が影響しつつ、夫の両親の下、息子の家族が集まって暮らすことで複合住居が形成・維持される。

ジュグー市で広くみられる朝の家事のひとつに、家の敷地内の掃き掃除がある。掃き掃除は、ヤシを束ねた全長30cmから60cmのほうきを片手で持ち、腰を曲げて行なう(写真1)。ほうきで集めたごみは、ごみ箱へ入れるか、茂みに直接投棄する。ジュグー市の家では、日中の厳しい日差しを避けるため、日陰を作るマンゴーの木を敷地内に生やしていることが多い。多くの家庭には扇風機

もエアコンもなく、日中室内が暑く感じるときには、木陰で家族や訪問客と談笑する。台所が室内になく、玄関先で料理をすることも多い。そのため、朝の掃き掃除で集めるごみは、前日の活動で地面に残したビニル袋、調理くず、木炭、および落葉などが目立つ(写真2)。

掃き掃除は、重要な家事のひとつと認識されている。調査のため9時頃にある家庭を訪問した際、70代の女性は「私が若い頃だったらこの時間に掃き掃除をしていないことはなかった」と言い、息子の嫁が掃き掃除を終えていないことに言及した。また、「掃き掃除で集めたごみを家の外に出していなかったら、夫は腹を立てる」と言う女性もいた。こうしたことから、掃き掃除は以前から続く習慣であり、家が掃かれていることは、人々にとって重要だと察することができる。加えて、複合住居において、義理の姉が朝早く起き掃き掃除をしないことを批判する女性がいた。一方、独身男性は、掃き掃除をしなくても家の主婦らからの批判は強くない。ごみの対処方法の主なもののひとつである掃き掃除は、女性の役割として認識されているようで



写真1 朝8時頃、家の掃き掃除をする女性



写真2 掃き掃除で集められたごみ

ある。毎朝掃き掃除をする女性の心中には、夫や義理の家族といった家のメンバーとの関係に波風をたてたくない気持ちもあるのかもしれない。

捨てない食べ残し

続いて、家庭でのごみに関する別の実践として、食べ残しの対処方法に言及する。これも掃き掃除と同様、家の女性が担い手であることが多い。

ジュグー市の人々の食生活は、夕飯に重きが置かれる。朝や昼は食事販売をする女性が簡単にみつかるが、夜も更けると外で食事する場所はみつからない。空腹のまま眠らないよう、夕食はお腹にたまるトウモロコシを練った固粥や、杵と臼で突いたヤムイモが定番である。

「食事が余ったらどうするか？」という質問に対し、「食事は足りないので余ることはない」と答える主婦は多い。農村部出身の女性は、「都市では何でもお金を払わないといけない。家賃、電気、水、食べ物、何でも」と言いつつ、生活の厳しさを私によく強調していた。人々は家計をやりくりし、日々の暮らしを成り立たせている。米やスパゲティを使った登場頻度が低い料理は飽きが来ず、なおさら余らないという。

しかし、作った料理が余ることはある。料理が塩辛い、食事の時間に食欲がないといった理由からである。ジュグー市では気温が高いうえ、家庭に冷蔵庫が普及しておらず、食べ残しの保存が簡単ではない。他方、食べ物を「捨てる」ことはよしとされていない。こ

こで「捨てる」行為には、排水溝に流す、他のごみと一緒に空き地に投棄する、または収集してもらう、などが該当する。

主婦は、食べ残しをなるべく捨てないように工夫する。生活の厳しさも影響しているだろうか、多くの家庭で食べ残しを食べる優先順位は、人、次に、動物である。まず、動物に食べられることを防ぐため、ふたのできる器や保温容器に入れておく。時間が経っても腐っておらず、人が食べられる場合には、再び調理をする。トウモロコシの固粥であれば、水で洗い、翌日改めて調理する際に加える。突いたヤムイモであれば、小さくちぎって太陽光で乾燥させる。乾燥後、炊くと米のような見た目と食感になるという。

食品の腐敗が進み、人が食べるための再調理に向いていない場合、動物に食べさせる(写真3)。その際、家で飼育している動物に食べさせる場合と、外から来る動物に食べさせる場合とがある。ジュグー市には、鶏、鳩、ヤギ、羊、ウサギ、犬、牛、または馬と



写真3 トウモロコシの固粥の食べ残しを食べる動物

いった家畜のいずれかを飼っている家庭が少なくない。こうした家庭では、食べ残しは動物に食べさせる。家で動物を飼っていない場合も、家の扉を開けておくと外から他の家の動物が入ってきて、置かれてある食べ残しと調理くずを食べる。人々は、動物の飼い主が誰かも知らないが、家に来た動物を追い払うことはあまりない。逆に、動物を飼育する家の人々も、日中に動物がどこへ何を食べに行っているかを知らない。夜になると、家に帰ってくるそうである。

おわりに

本稿では、ベナン中北部の都市ジュグー市における、家庭でのごみに関する実践を2つ紹介した。まず、ジュグー市の家庭では、掃き掃除の習慣がみられた。掃き掃除により家からごみを除去することは女性の重要な役割のひとつであり、掃き掃除をしなければ批判の対象になり得る。では、隣近所や地区のレベルでも、常に女性の役割なのだろうか。それとも、家と家同士の問題として、主に男性である世帯主が担うのだろうか。はたまた、公共の場の問題として、市役所による管理が期待されるのか。家庭での掃き掃除をヒントに、隣近所や地区でのごみの除去の担い手と、その役割および認識についても、調査

を進めたい。

次に、食べ残しを捨てない工夫に言及した。人々は、食べ残しをごみと一緒に捨てる前に、注意して保存し再調理する、または家の内外の動物に与える。そもそも食べ残しがあまり出ないことは、継続されるとよいことだろう。それに加え、食べ残しから、動物に与える以上の価値を還元する手段を見出すことができれば、捨てることを望まない姿勢も尊重しつつ、人々にとってより望ましいのではないだろうか。

また、今回の滞在は入学後初めての渡航であり、新しいことに多く出会った。たとえば、ごみ収集に加え、トイレおよび上下水道のない暮らしを経験し、人々の感覚に近づけたのではと感じる。滞在中、1ヵ月間ホームステイをさせてもらった家では、自分自身が出したごみ、排泄物および生活排水が自分の生活範囲にとどまり続けた。それによって、恥ずかしく後ろめたいような気持ちもあり、自分事として捉えることにつながる機会となった。

引用文献

- B.E.S. (Bureau d'Etudes Salam). 2019. Rapport Diagnostic de l'Etude de Référence du Projet d'Appui à la Gestion de Déchets Solides Ménagers dans la Ville de Djougou.